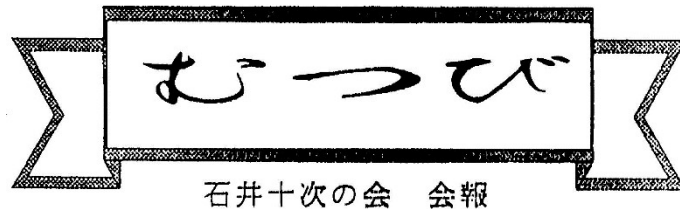


2022年
(令和4年)
8月10日



299号

石井十次先生の理念に導かれて

西都市 ^{さ さ き} 佐々木 ^{みちこ} 玄子

今から8年前の6月のある日、午前10時に近い時刻、私たち夫婦は市役所の北駐車場に居た。熱海からの来客（女性Tさん）と市役所の正面玄関前で待ち合わせるためであった。

そもそも、夫とTさんとの出会いは、その1年前の7月のこと。夫は東京方面へ実弟との気ままな二人旅を楽しんでの帰途、熱海で一泊した時であった。夜の熱海をとホテルから出て散策し、そこでフラッと入ったのが彼女の店であったという。二人の飲みながら、食べながらの雑談に、その言葉のやりとりに彼女はとても懐かしさを覚えたという。「どちらからですか？」

「九州です」「九州は？」「宮崎です」「やっぱり・・・」「こいつは弟で宮崎市の方に、私は西都という所に住んでいます」。いろいろ話のやりとりがあって後、彼女が言った。「西都ですか、茶臼原はご存知ですか？あ、茶臼原と言ってしまった」。彼女はよほど西都という地名に心を揺す振られたのだろう。茶臼原というところまで言って『しまった』と言ったのである。しかし、そこから先は、自分は石井友愛社の施設で育ったこと、三人姉弟一緒にそこで育ったことなどを一気に話したという。そして、これまで自分達は施設育ちということを他人様には一度も話したことなどなかったのに・・・と言われたそう。でも今、何十年かぶりに宮崎弁、イヤ茶臼原という言葉聞いて口にして、何とも言い様のないなつかしさを覚えたに違いない。三人姉弟はそれぞれの地で家庭をもち、時々寄り合いつつ今日までを過して来たのだそう。たとえ、どんな暮らしをしてもお天道様に背を向けるようなことは決してしないで生きていこうと誓い合って頑張ってきたという。

人は生まれた所、育った所に戻ってみたいという気持ちを誰もが持っていると言うが、彼女も『一度戻ってみたいなあ・・・と思っている』と言われたので「そのときは是非、連絡を下さいヨ。ご案内しますヨ」ということを伝えて、この店を後にしホテルへと戻ったのだそう。その後、何度かメールのやりとりをして、今回の運びとなった訳である。「こちらに来られるのなら我が家に泊まってもらっても構わないヨ」と言ったのだが「ホテルを予約したから」と言われた。「それじゃあ、そのホテルまで迎えに行きましょう」と言うのと「レンタカーで西都まで行くから大丈夫です」とのこと。それで、市役所前での待ち合わせとなったのである。

携帯が鳴る。「車のナビが変な所を案内して・・・定刻通りに着かないかも・・・」と。ほどなくして車は到着し、ドアが開いた。Tさんと夫とは一年ぶりの再会であった。Tさんは姉と弟を伴っての三人旅であった。

今日の御案内する所は午後1時の待合せ時刻だったので、それまでの間をまず西都原に案内した。鬼の窟や4号地下式横穴墓などを案内してから近くにある県立西都原考古博物館へ。館内のガイドには中武さんという方が付いて下さり、1cmを10年に見立てた館内のスロープが古代の世界へといざなってくれた。弟さんはここの展示物に大層関心を示され、いい所を案内してもらったと、とても喜んで下さった。博物館を後にして予約していた『このはな館』で昼食をとった。食事中、お姉さんは妻高校に通っていたと言われたので「高校に行ってみましょうか」とお誘いしたが首を横に振られた。「私が浅はかだったのヨ。あの頃、私は妹や弟のこ

を思うと一日でも早くこの施設を出て働かねば・・・と考えていて、それで中途退学をしてしまったので卒業していないの。卒業していたら私の人生も変わっていたでしょうに・・・」と言われた。私は返すことばが見つからなかったが、あゝご苦労があったのだなあと思った。後日、理事長である児嶋草次郎先生にごあいさつに伺った折にこの話をしたら、当時、施設から高校に通える人というのは成績はもとより相当に人格もいい生徒でないと行けなかったはず・・・とおっしゃられていた。昼食をすませ、いよいよ茶臼原の友愛社の方へと車を先導した。温厚そうな理事長先生がお待ちになって下さっていた。

車から降りた三姉弟の方々は、とてもなつかしようにあたりの景色を眺めている。特に弟さんは理事長先生とは幼馴染だったらしくお部屋に案内され、楽しく談笑されて2時間はあっという間に過ぎていった。「クリスマスやお誕生会のときはここを使ったのよネ」という館にも入らせてもらった。「この障子の入っている奥の方はステージになっているのヨ」そう言ってTさんはそっと障子を開けて見せた。なるほど20cm位の高さはあるだろうか、そこは舞台のようになっていた。

周りはとても静かで、小鳥のさえずりが聞こえている。何とも言えないいい場所であった。きっと、片時も忘れ得ぬふるさとのぬくもりを感じとられたことでしょう。理事長先生は資料館も、施設の方にも案内をして下さった。彼女達の胸中はどうな思いだったのでしょうか。最後に先生とご一緒に写真を撮り、友愛社を後にして、石井十次先生の墓前にもおまいりをし、茶臼原小学校を訪ねた。事情を話したら校長先生は快く校舎に入れて下さった。校長室では当時の写真なども見せて頂き、三人はなつかしがっておられた。当時は300人はいたであろうに、今（平成26年）は40名そこそこ。でも子ども達は皆、見知らぬ私たちに元気なあいさつをしてくれた。校長先生が「この方たちは君たちの50年以上も前の先輩だよ」と話されると「ウワー」と歓声が上がった。丁度、下校時間帯だったので「さよなら」と大きな声であいさつをして帰って行った。

さあ、私たちもこれで三姉弟の方たちとはお別れです。互いにあいさつを交わしたものの、さて、ここからうまく宮崎市まで行けるかと心配になり、高速入り口を過ぎた所までを先導することにした。バイパスの待避所に互いの車をとめ、今度こそ本当にさよならのあいさつを交わした。弟さんは「なぜ見知らぬ自分達に、ここまで親切にしてくれるのかが不思議でならないと、何度も何度も思っていたが、それは自分の考えていたことが間違いであったと気付かされ、本当に本当にありがとうございます」と言って下さった。『良かった』私たち夫婦は安堵の胸をなでおろすことができた。誰それから受けた親切を今、こうして一期一会で逢えた人の一つお返しをさせて頂くことができた。

「ここからはもうまっすぐに行くだけでホテルに着くからネ」「ありがとう。又、きっと来ようと思います」「そのときは、今度は、西都古墳まつりを見せてあげるヨ」

三人を乗せた車は、静かに動き出し、私たちの視界から消えていった。お互いこれから先の人生、幸せに暮らせますように・・・」

彼女たちはあくる日、宮崎を観光し、その翌日には飛行機で帰られたようであった。

後日、メールが入った。「ありがとう。感謝しています」と。三人へはあの日、あちこちで写した写真をアルバムに仕立てて3冊送付した。「宝物ができました」とメールが返ってきた。弟さんからも電話がきた。「今回の旅はまるでドラマのようだった」と。

昨年（2021年）の熱海での土砂災害の折、『大丈夫ですか』のメールを送ったことは言うまでもない。

天は父なり 人は同胞なれば 互いに相信じ 相愛すべきこと・・・

私はいつも十次先生のこの理念を諳んじている。

子どもたちに 大きな愛を

社会福祉法人 愛生会

エーデルワイス幼保園

園長 あいこう こうこ 愛甲 幸子

都城支部会員

「愛に生きる」という言葉が私たちの原点でした。

主人と41年前の昭和57年に11名の子どもたちをお預かりして無認可園で「エーデルワイス音楽幼児園」が始まりました。

私が26歳の時でした。今思うにお金の苦勞(無一文での出発)と言う迷いもなく、前しか見えていませんでした。

現在は「社会福祉法人 愛生会 エーデルワイス幼保園」となり、園舎も拡大新築してお陰様で順調に運営しております。今年の4月からは、旧園舎も「ビバーチェ」と言う学童施設として開校しました。

石井十次先生の生涯は、巡礼の子を預かったことから「児童福祉の父」と呼ばれるまでの偉業を果たされています。

そして、児嶋草次郎先生がそのご遺志を継がれておられる姿は、まさに現代の十次先生と呼ぶに等しく感じます

都城の石井記念有隣園、石井記念仁愛の家などを見学させて頂くと、職員の皆様が暖かく子どもたちに愛情をもって接しておられる姿に石井十次先生のお心を感じます。

エーデルワイス幼保園では、音楽を通して、豊かな情操教育を基盤に「どの子も育つ！ 育て方ひとつ！」と「やればできる！」をモットーに、日々100名の子どもに愛情を注いでいます。

石井十次先生も運営に苦慮されながら工夫し、幾多の試練を乗り越えられてきた歴史は、私と主人に重なる事も多く、「子どもたちの為に、何があっても頑張rinaさい」と十次先生の写真の大きな目が語り掛けています。

人を愛することは、全ての命を大切にする大きな原動力になります。

これからも「愛に生きる」の原点を忘れずに幼児教育に頑張ri続けようと思います。

追記 ※編集委員会からの情報

寄稿者 愛甲幸子様経営のエーデルワイス幼保園がなんとNHK「鶴瓶の家族に乾杯」の訪問を受けて、来る9月5日(月)12日(月)に放映との情報が届きましたのでお知らせしま

★新会員のご紹介（敬称略）

【高原町】中嶋須智子 黒木幸応

末永充 林多津子

【新富町】尾山正樹

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【宮崎市】芥川恵子

【都城市】津曲利幸

【川南町】都築太左衛門 都築アツ子

【愛知県】田爪光信

【大分県】植木洋子

ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により7月20日までのものとしています。

★9月号の通信発送作業

9月12日(月) 9時から

13日(火) 9時から

★石井十次セミナーについて

8月開催予定でしたがコロナ蔓延のため今年も中止となりました。

来年こそは皆様にお会いできることを願っております。

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

社会福祉法人 石井記念友愛社

☎ 884-0102

宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1
後援会「石井十次の会」

TEL/FAX 0983-32-4612

メール

yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

●高鍋高校内にある「岡山孤児院精米所」記念石碑

高鍋高校の校舎の中庭に「石井十次先生 精米所跡 昭和30年5月1日設置」と彫られた小さな石碑が置かれています。この石碑があることはあまり知られていません。石碑が小さくて目立たず、外部からわかりにくい校舎の中庭にあるからです。でもこれは石井十次がこの場所で、孤児院の精米所を営んだことを示す大事な記念碑なのです。



精米所跡を示す記念碑

石井十次は、茶臼原の農地で労働を通じて教育を行うことを決意し、明治27年に岡山孤児院から年長の男児60余名を茶臼原に移します。明治29年には十次自身が高鍋に帰り、孤児が自立して生活できるように殖産事業を起こします。これらの事業は孤児院の独立自活の中心になると同時に、この地域の経済的な活力となりました。



校庭内に置かれた石碑

その中心は農業部で、最初の移住者を中心に原野を開拓し農産物を生産。また50町の原野に桑を植え養蚕業を目指しました。

小丸地区に「日州活版所」を設け、13名で経営します。

同地区に「理髪部」も設けます。

明治30年に萩原地区に「精米部」を設け6名で経営します。そこには以前には高鍋製糖株式会社があり砂糖を生産していましたが、採算があわず解散しました。この設備・敷地・建物を十次が買い取り、精米工場にしました。

12馬力の蒸気駆動の精米機械4台を用いて、1日に白米60俵を精米しました。当時としては最先端の精米工場でした。その場所がここだったのです。

十次の理想のもと、孤児たちが自立して生きる道を求め、昼夜汗を流して精米作業に精を出した場所として、記憶されるべき場所です。

(参考文献：高鍋町史、信天記 西内天行著)

*編集後記

「むつび」巻頭の1~2頁は佐々木玄子様に玉稿をいただきました。大変ありがとうございました。

新型コロナウイルスは第7波が襲来し、全国的にきびしい状況が続いています。異常気象による豪雨災害も全国で発生しています。お互いに気をつけて過ごしましょう。

*文責 石川正樹